

## メッセージアウトライン 創世記13:1～18「アブラムとロト」

[1-2] 「そこでアブラムはエジプトを出て、ネゲブに上った。妻と、所有するすべてのものと、ロトもいっしょであった。アブラムは家畜と銀と金を非常に豊かに持っていた」

アブラムは妻サライを妹だと偽ったことによって、エジプトで彼女を危険な目に合わせ、彼自身も神を信じる者としての面目を失うこととなった。エジプトでのそのような危険から救い出されたのは、彼の信じる主なる神のあわれみ以外の何ものでもなかった。アブラムの一行は再びカナンの地に入り、ネゲブにまで行った。ここはカナン地の南部である。彼はエジプトで羊、牛、ろば、らくだなどの家畜と男女の奴隷を所有するようになり、銀や金にも富む者となっていた(12:16)。しかし、このような豊かさが彼らに問題をもたらすこととなった。

[3-4] 「彼はネゲブからベテルまで旅を続けて、ベテルとアイの間にある、最初に天幕を張った場所まで来た。そこは、彼が以前に築いた祭壇の場所であった。アブラムはそこで主の御名を呼び求めた」

本当はさらに北のシェケムが最初に祭壇を築いた場所であるが(12:6-7)、ここではベテルとアイとの間の地に来てから初めて祭壇を築いた場所という意味。そこは彼がカナン地の地に入った時に自分に現れてくださった主に対して祭壇を築き、主の御名によって祈り、礼拝をした場所であった。アブラムはその場所に来てもう一度、主の御名によって祈り、礼拝をささげたのであった。それは神を信頼しないでエジプトへ行ったことの悔い改めの祈りとともに、神がこの地を与え、祝福しようとしてくださっているということの自覚をもう一度新たにしたものであっただろう。

[5-7] 「アブラムと一緒に来たロトも、羊の群れや牛の群れ、天幕を所有していた。その地は彼らが一緒に住むのに十分ではなかった。所有するものが多すぎて、一緒に住めなかったのである。そのため、争いが、アブラムの家畜の牧者たちと、ロトの家畜の牧者たちの間に起こった。そのころ、その地にはカナン人とペリジ人が住んでいた」

この争いは牧草や水の取り合いから起こったことであろう。カナン人はハム族に属する人々で、ペリジ人はそれには属さない先住民族であったと思われる。アブラムとロトは彼らの領域を犯さないようにして牧草地や水を捜さなければならなかったので問題はよけいに厄介であった。

[8-9] 「アブラムはロトに言った。『わたしとあなたの間、また私の牧者たちとあなたの牧者たちの間に、争いがないようにしましょう。私たちは親類同士なのだから。全地はあなたの前にあるではないか。わたしから別れて行ってくれないか。あなたが左なら、私は右に行こう。あなたが右なら、私は左に行こう』」

ここでアブラムはロトのおじであり、年長者として当然彼にあるはずの選択権をロトに譲っている。これは彼の信仰から出てきた行為であった。アブラムは彼を祝福すると

の約束を与えてくださった神にのみ信頼し、自分の権利、権威を主張しない。彼はエジプトに行ったことの失敗から学び、自分の知恵ではなく主に寄り頼もうとしているのである。

[10-11]「ロトが目を上げてヨルダンの低地全体を見渡すと、主がソドムとゴモラを滅ぼされる前であったので、その地はツォアルに至るまで、主の園のように、またエジプトの地のように、どこもよく潤っていた。ロトは、自分のためにヨルダンの低地全体を選んだ。そしてロトは東へ移動した。こうして彼らは互いに別れた」

ロトもおじのアブラムを差し置いて自分が先に選ぶということについては多少の葛藤があったであろう。しかし、彼は信仰的というより現実的なほうに重きを置く人間であったようである。彼らが今いるベテルとアイとの間にある土地は山地であって、そこから南方を見渡すと死海へと続くヨルダンの低地全体と死海の南に位置するツォアルまでを見ることができた。ソドムとゴモラも主が滅ぼされる前であったのでと注釈がつけられているが、やはり死海の南部にあった。しかもそこは主の園（エデンの園）やエジプトの地のようによく潤っていた。ロトとアブラムは共にハランの地を出て主の約束の地カナンへ来たのであるが、彼が土地を選ぶときに主に導きを祈ったとは書かれていない。今まではおじのアブラムの後についていけばよかったかもしれないが、これからは自分の判断で生きていかなければならない。信仰を働かせ、信仰を持って決断し、行動しなければならぬ。しかし、彼はそれをしなかった。彼にとっては目で見たもの、見えるものがすべてであった。それでロトはこのヨルダンの低地全体を選んだのである。東へ移動したとは、ロトがいったん南のヨルダンの低地へ下り、その後、そこからソドムとゴモラの町のある東へ移動したという意味である。

[12-13]「アブラムはカナンの地に住んだ。一方、ロトは低地の町々に住み、ソドムに天幕を移した。ところが、ソドムの人々は邪悪で、主に対して甚だしく罪深い者たちであった」

アブラムはその地にとどまったが、ロトはヨルダンの低地に下り、やがて時間の経過とともに、渦に飲み込まれるようにソドムに近づき、ついにその町に天幕を移した。つまりそこに住みついてしまったのである。後にこの町の様子がわかるが、この町は主の前に甚だしく罪深く、特に道徳的、性的に非常に墮落していた。

[14-17]「ロトがアブラムから別れて行った後、主はアブラムに言われた。『さあ、目を上げて、あなたがいるその場所から北、南、東、西を見渡しなさい。わたしは、あなたが見渡しているこの地をすべて、あなたに、そしてあなたの子孫に永久に与えるからだ。わたしは、あなたの子孫を地のちりのように増やす。もし人が、地のちりを数えることができるなら、あなたの子孫も数えることができる。立って、この地を縦と横に歩き回りなさい。わたしがあなたに与えるのだから。』」

ロトとの別れの後、主からの語りかけがアブラムにあった。「さあ、目を上げて」ロトも目を上げて自分の選ぼうとする地を見渡したが、今度は主ご自身が直接アブラムに

語られた。片や最も良いものを選び取ろうとする目、片や主のことばに従って自分の利益に固執しない澄んだ目。主はこのように主により頼む信仰を持ったアブラムに今彼がいる場所から北、南、東、西、つまり360度全部を見渡すように言われ、彼とその子孫にこの地をすべて与えると約束してくださった。これは12:7で主がアブラムに約束してくださったことと同じ内容であるが、さらに具体的な内容が述べられている。「永久に」アブラムから二代目か三代目で終わりではなく、それがずっと彼の子孫に永久に与えられていく。これは大きな祝福である。また彼の子孫が地のちりのように数えきれないほど増え広がり、繁栄することも約束される。17節の「立ってこの地を縦と横に歩き回りなさい……」との約束は彼が歩いた範囲だけが与えられるということではなく、主が与えてくださったカナンの地全体を所有するための象徴的な儀式であったと考えられる。アブラムはどのような思いで歩いたことだろうか。

[18]「そこで、アブラムは天幕を移して、ヘブロンにあるmamreの榿の木のそばに来て住んだ。そして、そこに主のための祭壇を築いた」

ヘブロンはアブラムがいたベテルとアイの間の山地より約50km南の山地である。ここはロトが選んだヨルダンの低地とは山地を挟んだ反対側、西側にあたる。すなわち彼らが全地をながめたベテルとアイの間の山地から見てロトは左側へ行き、アブラムは右側へ行ったのであり、これは9節のことばどおりである。mamreとは14:13によればヘブロンに住んでいたアモリ人の名前であり、そこに大きな榿の木があったのである。アブラムはこのmamreと盟約を結び、その地に住む者となった。そしてそこに主のための祭壇を築いた。すなわち自分を導き守り、祝福して下さり、このカナンの地を与え、彼の子孫が地のちりのように増え広がると約束してくださった主なる神を心から礼拝したのである。

私たちがロトのように目先のことだけで物事を判断して、後で大きな悔いを残す者とならないように心しなければならぬ。私たちはアブラムの例にならぬ、主がどのように導いて下さるか、みことばの約束に照らし合わせ、謙虚になって祈り、導きを求めて行く必要がある。

私たちの救い主イエス・キリストもこの地上におられる時、父なる神のみこころに従順に従われ、ついに私たち人間の罪の贖いを成し遂げてくださった。私たちが、ひとり子イエス・キリストを与えるほど私たちを愛して下さり、祝福しようとして下さっている主なる神を心から信頼し、より頼み、信仰の歩みを進めていく者になりたい。そこにこそ大きな祝福があるのである。